



にじいろ 虹色

平成23年2月

＝ 発行 ＝

秋田県生涯学習センター

〒010-0955 秋田市山王中島町1-1

TEL : 018-865-1171

FAX : 018-824-1799

E-mail : sgcen002@mail2.pref.akita.jp

編集担当：社会教育アドバイザー

しばれる朝は、身が引き締まります。「かた雪わたり」の季節です。雪に覆われた田んぼや畑や小川の上をまっすぐに歩いていけるのです。歩くと雪は、キュッキュッキュッキュときしんだ音を奏でます。そして雪面には、靴とこすれたかた雪のかけらが残ります。ランドセルを背負った友達の声、吐く息の白さ、頬をさす寒さなど、子どものころの体験は、何十年経っても鮮明にその感覚が甦ります。今の子どもたちには、どんな感覚が残るのでしょうか。ゲーム機やパソコンのボタンを押す音と触感、携帯電話から流れる電子音、テレビの映像などでしょうか。ふるさとの風景、原体験としての心のふるさとを、子どもたちに残してあげたいものです。

大人から子どもに伝達すること

『人だから、人から学ぶ』という姿勢

過日、iPS細胞の大発見により奇跡が起こったことを知りました。動かなくなっていた心臓が、iPS細胞から育てた細胞の移植により動くようになったのです。人工心臓の装置で体内の血液を循環させていた人が、外を歩くことができる状態にまで回復したのです。

そのiPS細胞を発見した人が、京都大学iPS細胞研究所長、山中伸弥教授です。山中教授は、整形外科医だったころ、山中と呼んでももらえず、「手術の邪魔ばかりするから邪魔中だ」と言われたり、30分でできる手術に2～3時間かかったりして、挫折と失意の研修医時代を過ごしました。その後、仕事を2度ほど変え、やっと出合った今回の研究で奇跡の発見があったのです。

人には、『直線型の人生』とクルクル回転する『回旋型の人生』があり、山中教授自身は、直線型の人生ではなかったと語っています。

奇跡といわれる世紀の大発見を成し得た山中教授でさえ、長い苦勞の年月があったのです。山中教授の生き方に共感し、iPS細胞の大発見に感謝したいと思います。身近な人々や活躍している人々の生き方について、家族で語り合ってみてはいかがでしょうか。変化の激しい時代だからこそ、子どもたちには『人だから、人から学ぶ』ことの意味を教えたいものです。

平成22年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会が開催されました！

学校 × 家庭 × 地域 = ∞

これからの『生涯学習・社会教育』の話をしよう



平成23年2月3日、平成22年度文部科学省委託『社会教育による地域の教育力強化プロジェクト』秋田県生涯学習・社会教育研究大会が秋田県生涯学習センターで開催されました。学校・家庭・地域の連携の重要性やこれからの生涯学習・社会教育について研修を深めました。

春蘭や薔日よひとに色づきぬ
嫁ぐ子の母に寄り添い雛飾る
針供養十指の齡よひ隠れなし

武藤 四郎



< 事例報告 >

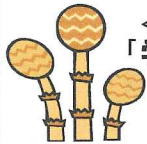
すずめ、チョコボラプロジェクト！



「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」について、秋田県生涯学習センター 佐々木伸一主任社会教育主事から事例報告がありました。「公民館の活性化」により、『知の循環型社会』の構築を目指した小坂公民館と角館公民館の取組が紹介されました。

公民館を核にした生涯学習ネットワークが形成され、チョコボラが展開されていくことにより、人々の絆は強まります。活性化された地域になることでしょう。チョコボラを県内全ての公民館で進めていくことの必要性を感じました。

※ チョコボラ (チョット・公民館で・ボランティア)



< 講義 >
「学校・家庭・地域の連携に向けた社会教育関係者の役割」

青山学院大学 教授 鈴木 眞理 氏



社会教育の内容は、奉仕、子育て支援など増えてきている。生涯学習社会というけれど、社会教育は分かりにくい。生涯学習＝社会教育と考えられているが、生涯学習を支援するために社会教育がある。社会教育の成果はすぐに出ないが、後に出てくることがある。現代的な課題や公共的な課題に対して社会教育関係者として何をすべきか考えなければならない。

学校中心の教育観は、修正されているのか。学校教育と社会教育のやり方には違いがある。社会教育の特性に注目すると、社会教育担当者の自覚・自負・自信の復活が必要である。参加者が少なくても、継続することが大事である。それが行政の役目である。様々なことが様々なやり方で行われているが、自分も楽しむし、相手のためになるボランティアが大事である。自発性・相互扶助・総合的・成果の社会還元・不定型・自律性・連携・時間的柔軟性などを重視したい。役所は基本的なことをやらなければならないが、役所だけでなく、NPO、地域等と連携して活動を展開する新しい公共もある。「古い公共」あつての「新しい公共」である。

< シンポジウム >
「実践から探る学校・家庭・地域の連携のあり方」

- 地域社会と共に歩む学校づくり
～コラボ・スクール構想による学校変革～の紹介
大仙市立太田南小学校 校長 小笠原 重夫 氏



コラボ・スクール構想には、四輪駆動車のように、学校、家庭、地域社会の他に、4つ目のタイヤ（教育委員会、NPO等）の連携が必要だと考えている。学校の課題の変容を具体的に示して、教職員に連携の成果を理解させていく。太田南小学校では、家庭・地域社会との連携、学校間・校種間の連携、行政機関・地元企業等との連携、各界の専門家等との連携の4つのコラボを実践している。ステップ1「参加」、ステップ2「協力」、ステップ3「参画」と、連携のステップが進んでいく。秋田県の学力が高くなっているのは、学校・家庭・地域・教育委員会の施策の連携の結果である。

- NPO法人子育て応援Seedの活動紹介 Seed理事長 山崎 純 氏



平成12年、在宅向けの育児サークル「スマイルキッズ」を始動させた。その後、活動が次第に広がっていった。現在、事業として、講演会等で子育て支援、親子食育講座などで子育て学習会、情報誌で子育て情報の提供、託児活動、外国の方々とのふれあい等で子ども健全育成支援、コミュニティサロン「クローバー」の運営、わんぱくキッズのお出かけプランなど、多様な活動を展開している。赤ちゃんからお年寄りまでを応援していきたいと考えている。シニアやシルバー世代の交流も考え、「中通倶楽部」を作った。子どもたちの10年後、20年後の秋田県に不安がある。親世代が秋田を誇りに思い、子どもを大切に子育てをしていくと、郷土愛が深まると考える。

- 浦田小学校の野焼き体験活動の紹介 北秋田市生涯学習奨励員 奥田 実里 氏

東京出身の奥田氏が浦田に来て、豊かな自然があるのに、閉塞感があると感じた。縄文時代の焼き物を見て、「こんなものを子どもたちに作らせたね。」と言葉を發したら、浦田小学校の先生が「お母さん、それをやりましょう。」と答えてくれた。そこから活動が始まった。それから、「縄文人の苦勞をしよう。」ということで、野焼きの方法をあちこちに出かけて行って学んだ。地元の会社の協力を得て、窯づくりから野焼きまでの一連の作業を子どもたちに体験させた。「笑う岩偶」が出土した地域なので、ふるさとの誇りにしたいと思っている。自分で作った作品は、使って初めて完成であることを子どもたちに話している。若い人たちには、無理をしてでも、子どもとかわる時間をもってほしいと思う。人生は、「思い出づくり」である。垣根を作らずつながりを築き、共に学び、行動を起こそうと呼びかけている。

【 講師&コーディネーター 鈴木 眞理氏より 】

社会教育にかかわった人が校長になると、地域と共に歩むいい学校づくりができます。一般教員にも社会教育に関わるようにさせたいものです。山崎さんの発表でも奥田さんの発表でも、自分たちが楽しみながら活動しています。連携しようなどと思わないで自然に連携しています。それぞれ活動は異なっているのです。自分たちのやり方で自分たちも楽しみながら活動していくことが何より大切です。

